

English Garden 第45話

"I have measured out my life with coffee spoons"

T.S. Eliot

「私は自分の一生をコーヒーのスプーンで計りつくした」

T.S.エリオット

前回に続きT.S.エリオットの"The Love Song of J.Alfred Prufrock"(J.アルフレッド・ブルーフロック氏の恋歌)からです。

主人公である中年のブルーフロックは、モーニングを着てアゴまで立ったエリをつけ、ネクタイにタイピンときっちり決めているものの、禿げた頭と細い手足が気になって劣等感にさいなまれ、「きっと女たちに笑われるだろう」という思いが先に立ち、どうしてもプロポーズすることができません。いっそ、思い切って宇宙をかき乱してみようかと大きなことを考えるものの、断られるよりは「いっそのことカニになって、海の底をカサコソ歩いていた方がましだ」と臆病になり、自問自答を繰り返します。彼はただ、女たちに"That is not it at all, / That is not what I meant, at all.; (そうじゃないのよ / わたし そんなつもりで言ったのじゃないわ)と言われるのが怖いのです。



But though I have wept and fasted, wept and prayed,
Though I have seen my head (grown slightly bald) brought in upon a platter,
am no prophet--and here's no great matter...
だがおれは泣いて断食し 泣いて祈ったのだが
おれの首が(ちょっと禿げているが)大皿にのせられて来るのをみたが
おれはしかし 予言者ではない 別に大したことはないがね
(大澤 実訳)

この部分はサロメの連想と思われ、一瞬自分が洗礼者のヨハネになったような気分になって自己満足を味わいますが、すぐに自分は予言者などではないと否定してしまいます。次にハムレットの連想が出てきますが、逡巡するハムレットの気分ではあっても、ハムレットにはなりきれません。("No! I am not Prince Hamlet, nor was meant to be.")自分の役割はせいぜい従者でちょっぴり舞台に顔を出し、「腰が低くこまめに立ち動き / 抜け目なく用心深く 小心翼翼 / 大言は吐くがすこし鈍くて / ときにはまったくお笑い草 / ときには 道化同然」と卑下してしまうのです。

ブルーフロックの人生は平凡な些事の連続で、まるで「コーヒーのスプーンで計るように」毎日が退屈に過ぎていきます。何ともいえない倦怠感の表われた表題の言葉は大いに現代人の共感と呼んでしばしば引用され、有名な言葉となりました。

ブルーフロックは"I grow old..."と老いを実感し、不相応な白いズボンをはいて浜辺を歩こうとすると、白波の髪をなびかせながら波乗りする人魚の姿が目につかび、幻想の中で人魚と戯れます。しかし、最後は「人声に目を覚ますと『私たち』は溺れていた」という言葉で結ばれています。

結局、ブルーフロックの訪問先も相手も不明のまま、この詩は"Love Song"のタイトルがなければおよそ恋歌とは思えない、内面的な独白の歌です。結びで溺れてしまうのが「私たち」と複数形になっているのは、作者自身が、現代人みんなに共通する意識と考えたためと思われる。この主人公は漫画化され、滑稽で道化に近い役を与えられていますが、読者はつい自分の姿を重ね合わせて、何ともいえない悲哀を感じてしまいます。この詩もなかなか内容をお伝えしにくい作品ですので、どうぞ原詩をご一読ください。多くの人の訳も出ており、「エリオット詩集」の中には大体収められています。